

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

センブリ *Swertia japonica* (Schult.) Makino (リンドウ科 Gentianaceae)

夏が去り、秋の気配が漂う頃、日当たりのよい山の斜面で可憐な花をつけたセンブリを見かけます。センブリは、日本、朝鮮半島、中国に分布する2年生草本（初年は根生葉のみ）で、茎は直立して分岐し、高さ5～25cm、太さ1～2mmでほぼ4稜形。暗紫色を帯び、葉は対生で無柄、線形ないし線状長円形で先端はわずかに鈍頭、長さ1～3.5cm、幅1～3mmでしばしば紫色を帶びています。9～10月ごろ枝先および葉腋に円すい花序を出し、白い花を多数つけます。花冠は5つに深裂して（稀に4深裂や6深裂もあります）、ほとんど離弁花のように見え、裂片は白色で紫色の条線がたてに通っています。裂片の基部には毛の生えた腺体が2個あり、果実はさく果で熟すると2片に裂けます。根はよく分枝して黄色、質はややかたく、全草に強い苦味があり、センブリ（千振）の名の由来は千回振りだしてもまだ苦いということによります。開花期の全草を採り乾燥したものをセンブリ（当薬、*Swertiae Herba*）といい、食欲不振、消化不良等に苦味健胃薬として粉末（センブリ末）、あるいは苦味チンキ（トウヒ、センブリ、サンショウウの3種の生薬からつくられるチンキ剤）として種々の処方に使用され、家庭では乾燥したもの1本を熱湯にしばらくつけて、苦味が出たところでその湯を内服するとよいそうです。不思議なことに、本植物は中国では、中薬として薬用には使われず、ドクダミ、ゲンノショウコとならび、日本三大民間薬の一つとされています。また、当薬とは、「^{まさ}に薬」の意で、薬効が^{あらたか}であることにより、日本でつけられた漢字名です。全草のエキスは毛根を刺激し発毛を促すとし、若はげ、円形脱毛症などに発毛促進薬として用いら

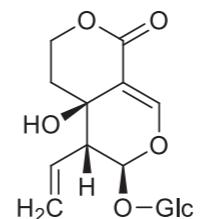
れています。以前、市販品のほとんどは、山形、秋田、石川、福島などの各県で野生品を採取したものでしたが、1977年頃より長野県で栽培が成功し、今では、長野県、高知県などで年間15トンの生産があるそうです。成分は苦味の本体をなすセコイリドトイド配糖体（苦味配糖体）のswertiamarin、フラボノイドのswertisin、キサンタン系化合物のswertianin、トリテルペイドのoleanolic acidなどが知られ、swertiamarinには動物実験で唾液、胆汁、胰液分泌増加作用が報告されています。

同属植物のムラサキセンブリ *S. pseudochinensis*

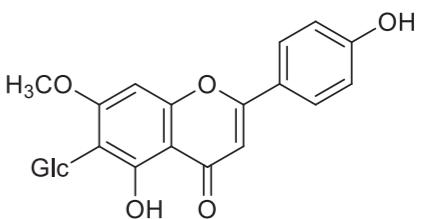
は我が国中部以南の山野に自生し、以前は、生薬として局方にも収載されていましたが、6局で削除されました。イヌセンブリ *S. diluta* var. *tosaensis* は我が国各地の原野に自生しますが、苦味が極めて弱く薬用に適さないとされています。また、チレッタソウ *S. chirayita* はインドで健胃薬とします。



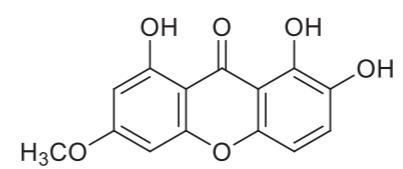
写真3 生薬：センブリ（千振、当薬）



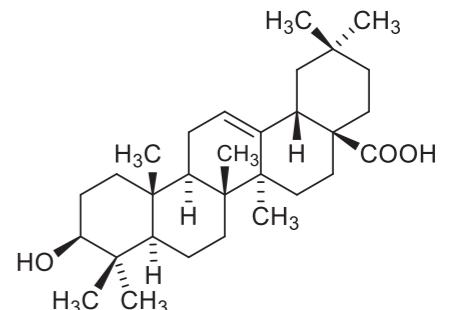
swertiamarin



swertisin



swertianin



oleanolic acid



写真1 センブリ（5深裂花）



写真2 センブリ（4深裂花）